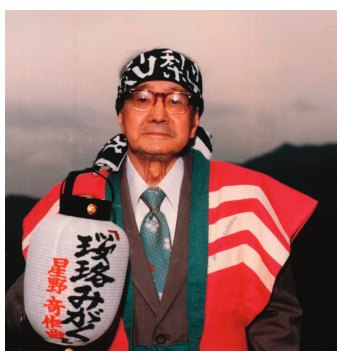
＊＊＊＊＊＊あなたの町の情報誌＊＊＊＊＊＊

住まいル新聞

日本ステンレス工業株式会社
発行/日本ステンレス工業株式会社
〒409-0617 山梨県大月市猿橋町殿上630-1
電話=0554-22-2500
FAX=0554-22-5234
Vol.110 2009 1月号

大月人物伝 北大に学び大月に生きた星野家当主 星野 奇（くすし）

星野 奇（くすし）は旧姓、置塩（おしお）奇といい、明治二十八年（一八九五）九月十七日、静岡県志太郡島田宿（現在の島田市）四八〇番地にて、父置塩藤四郎・母さだの五男として出生した。奇（くすし）とは奇の略字であるが、珍しい名をつけたのは、並みの子でない人に育って欲しいという両親の願いがあったのだろうか。男八人女三人の十一人姉兄弟の八番目で、兄弟げんかは本物の刀（真剣）でやっていたという。



■北大・瓔珞みがく・テニス

置塩家は伊勢神宮の神官の家柄であったので、奇は中学を伊勢の宇治山田中学に学び、大学は遠路、北海道帝国大学農学科に学ぶが、この北大で青春を大いに謳歌することになる。大正九年（一九二〇）北大予科は毎年恒例の予科会歌のコンテストを開催、奇は友人佐藤一雄が作詞した「瓔珞（ようらく）みがく」に曲をつけ応募、見事優勝を果たした。

さて、大正九年の北大予科会歌の優秀作のコンペ、場所は北大の学生寮恵迪（けいてき）寮の食堂。奇は食堂の隅にあったオルガンを引っ張り出して弾きながら蛮声を張り上げる。それが良かったのか、見事優勝となった。優勝賞金が当時三円。この三円で奇は大変な思いをする。 奇は優勝祝いに数人で、そばでもとって食おうと思ったそうだが、寮生にこれが伝わり、奇の部屋にじゃんじゃん皆が集まってくる。そばがなくなれば、もうどんどん勝手にそばやに出前を頼んでしまう。結局、賞金の三円では足りなくて、ほかに三円の足が出た。当時そばは五銭くらいとすれば、総計百二十杯くらいそばを食べたのであろうか。奇が楽しそうに話していた顔が今でも忘れられない、と孫の喜忠は語る。

北海道は札幌の街中に北海道大学植物園がある。入園するとすぐ高さ五メートルほどの「瓔珞みがく」の歌碑があり、この歌の歌詞は当時の北海道の様子を彷彿とさせる。

そのころ北大で青春を謳歌した若者達の元気な声が聞こえてきそうな、フッとそんな気がしてくる。この歌、作られて約八十五年、今も北大の学生に歌い継がれて生き残っている。最近まで札幌市内でタクシーに乗って「瓔珞みがく」や「都ぞ弥生」を聞きたい、と運転手に頼むとテープをかけてくれるタクシーも多かったとか。

昭和三十年代から日本の主に旧制高校の寮歌・愛唱歌などを懐かしむ集いが全国的な行事として「日本寮歌祭」が各地で催された。 奇は当時、既にほとんど物故されていた作詞・作曲者の生き残りの一人として寮歌祭に引っ張り出されていたが、壇上で指揮をとりながら元気に「瓔珞みがく」を高唱する姿は北大青春時代の姿そのままであった。

花咲の星野家前の「瓔珞みがく」歌碑は奇が昭和四十六年に札幌の北大植物園の碑をハーフサイズにして建てたものである。

「瓔珞みがく」
（大正九年 北海道帝国大学予科桜星会会歌）
佐藤 一雄作
星野（置塩）奇作曲

一、瓔珞（ようらく）みがく石狩の
源（みなもと）遠く訪（と）いくれば
原始の森は闇（くらく）して
雪解（ゆきげ）の泉
玉と湧く
二、浜茄子（はまなす）
紅（あか）き磯辺にも
鈴蘭香る谷間にも
愛奴（アイヌ）の姿薄れゆく
蝦夷（えぞ）の昔を懐（おも）ふかな
三、今 円山（まるやま）の桜花（さくらばな）
歴史は旧（ふ）りて四十年
吾が学び舎（や）の先人が
建てし功（いさお）はいや栄（さか）ゆ
八、想（おもい）を秘めし若人が
唇かたくほほえみつ
仰げば高く聳（そび）え立つ
羊蹄山（ようていざん）に雪潔（きよ）し

また北大では「ボーイズビー アンビシャス」で著名なクラーク博士の孫（当時北大に留学していたクラーク・世）と「テニス」（硬式）をやっていたそうで、実はやりすぎて一年どっぺった（留年した）とのことであった。北大庭球部OB。

■結婚・震災復興局・神戸住まい

思い出多い北大を卒業した奇は、大正十二年縁あって山梨県北都留郡廣里村花咲の星野屋、星野喜照（当時廣里村村長）の長女照子の婿として養子縁組し結婚した。

結婚後は学生時代に建築製図をしていたことから関東大震災に対処して出来た震災復興局に勤務することになり、東京の阿佐ヶ谷にて生活を開始した。横浜市公園課にて公園建設技師として横浜公園・山手公園・横浜商業学校運動場などの設計をした。大正十三年長女千鶴が誕生。その後、関西神戸近郊の御影に転居、長兄置塩 章の経営する神戸の置塩一級建築設計事務所に勤め、現宮崎県庁正面玄関前の庭園設計などを手懸けた。

■富士納豆

昭和九年に大月に戻った奇は、学生時代に納豆菌純粋培養の研究者の半澤 洵、北海道帝国大学教授（農学部長）の警咳に触れることがあったことから昭和十年に大月で納豆の製造販売を始めた。

当時県下には納豆製造業者は無く、山梨県にはその頃納豆を食べたことがある人はほとんどいなかったと思われる。それにしても「星野屋が納豆を作り始めた?」と、当時の大月の人々は驚いたことであろう。